

Title	<図書紹介>山本孝造『びんの話』日本能率協会 1990, 358P/宮内愨『箱』法政大学出版局1991, 337P
Author(s)	日野, 永一
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 95-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52904
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山本孝造 『びんの話』 日本能率協会 1990, 358P
宮内 愨 『箱』 法政大学出版局 1991, 337P

われわれの身の回りに何気なく存在するもの、特に消耗品に近いものは、いつの間にか変わっていて、気がついた時には昔の姿形を見ることができないといったものが少なくない。例えばアルミ缶や紙パック全盛の時代、牛乳瓶といった言葉も死語になりつつあるし、魚屋の店頭で見かける鮮魚の輸送容器も、発泡スチロールとなってしまった今、蜜柑箱と言えば段ボールしか思い浮かばないのも仕方がない時代となってしまった。

自動車や建築物ばかりでなく、使い捨てに等しい日常生活容器にもデザインの歴史がある筈である。従来こうしたモノの歴史はとかく好事家の仕事として見られがちであったが、最近優れた研究書が刊行されるようになったのは喜ばしいことである。そうした中から何冊かを紹介してみたい。

山本孝造『びんの話』は洋酒・清酒・醤油・清涼飲料水・牛乳・ビールなど、液体飲料等の保存・輸送に欠くことの出来ないビンの変遷について述べたものである。日本のビンが話題の中心であるが、当然海外で生まれたものであるから、そのルーツにも触れられている。しかしその製造技術が紹介されたからといって、すんなり日本に定着したわけではない。技術者たちの様々な苦勞がそこに秘められている。例えば大阪で徳永硝子製作所を創設した徳永玉吉は、輸入された英国製のラムネ瓶の製法を長年の工夫の後、ついに輸入品以上の品質の瓶の国産化に成功した例を見ても理解できる。

技術移転の具体例を、この本の中から探すのは容易である。

そのラムネ瓶の中のビー玉で「玉転がし」をして遊ぶために、イギリスでは瓶の回収率が悪かったそうだが、ラムネ瓶の記憶を持つ人ならば同感できるのではないだろうか。またそのビー玉は日本独自の名称でA玉に対しての名称であるとか、玩具としての発祥は大阪松屋町筋であるとか、意外なエピソードも多数紹介されているので、楽しみながら読むことができよう。

また、清酒の一升瓶が普及したのは、店頭で量り売りをしていた酒屋の中には、安酒や水を混ぜて売るものがいたからだとか、瓶を通して当時の庶民の生活や文化を伺い知ることが出来、興味ある一つの生活文化史ともなっている。

瓶というテーマであるため、明治以降の近代についての話が中心となっているが、ただ筆者は過去の瓶の姿を懐かしんでいるだけではない。戦後から現在の技術についても多く触れ、また「栓をあけて中身が飲みほされるまでは、とても可愛がってもらえる。しかしカラになったとたん、その多くはジャマモノにされてしまう」びん類について、資源問題からの観点も忘れない。われわれが見過ごしがちな生活の中のモノに光をあてた好著であろう。

著者は京都の老舗の仏壇屋さんの出身。ソニーのトランジスタ・ラジオの第1号機のデザインなど長らくソニーのデザイナーとして活躍をしていた人である。体系的な

記述でないが、デザイナーとしての目がありこちに光っている。私事で恐縮であるが、生活の道を捨ててまでビンの研究に打ち込んでいるという話を共通の友人を通して聞いていただけに、このような成果を挙げられたことは、私にとっても大変嬉しいことである。

宮内愼『箱』も、同じ容器についての研究である。著者は、この3月まで九州芸術工科大学で、4月から拓殖大学でデザインの指導に当たっている人である。著作は長年にわたる研究の集大成で、この業績に対し日本デザイン学会賞・日本産業技術史学会賞を授賞していることから、研究水準が伺われる。私も学会発表・共同研究等を通じ丹念な調査や論考については良く知っていたが、こうしてまとまった著作で改めて充実した研究内容に触れることは喜ばしい。

内容はまず箱の定義と分類を行い、生産技術の上からその原形について考察する。そして住生活の中での箱、信仰と箱、運搬に用いられる箱と、その用途から区別される各種の箱について日本と西洋のそれぞれを詳細な論で展開する。さらにその箱を作り上げる技術に触れ、最後に箱の文化として様々な問題を総合的に論じる。

箱と言うと現在では家庭で用いられる小型のものを想像するが、ここでは蓋を上に向けて開閉する形式の容器としているので、家具としてのスケールを持つ櫃やチェストまで含め、実際にはそれらの大型の箱についての研究が中心となっている。これは生活の中での重要性や、遺品の残存状況からいっても研究の中心にならざるを得ないのであろう。時代的にも伊勢神宮の祭祀用の

箱から日通のコンテナまで、また相撲の明荷や軍用行李も取り上げるというように、箱の機能を持つものには貪欲に目を向ける。その機能も実用的機能だけでなく社会的機能も含め、ファニチャー型・ストリージ型・パレード型・コンテナ型に分類する。ただ著者も述べているように、箱の機能を改善しようとすれば箱であることを否定せざるを得ない一面があるが、櫃・長持といった箱類が箆笥の出現によって消えていく、言わば容器の生態学といった側面にもう少し触れて欲しい気持ちが残る。

数多い事例の詳細な研究を含んだ300頁を越す大冊を簡単に紹介するのは困難でありこれ以上述べないが、従来目を向けられることの少なかったモノについての本格的な研究が行われるようになってきたことは、デザインの理論的研究の前途の広さを示すものであろう。

なおついでに、こうしたモノの歴史に関する本で、最近たまたま私の目に触れたものに山口昌伴『台所空間学』（建築知識社、1987年）や小泉和子『道具が語る生活史』（1989年、朝日新聞社）等があったことを付け加えて置こう。

日野永一 兵庫教育大学